
エランドブレイブ

せきゅあ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

エランドブレイブ

【Nコード】

N1578Q

【作者名】

せきゅあ

【あらすじ】

猛神一族は代々異能を操る血を宿す。そんな血筋に生まれた猛神^{たけがみ}神^{おぼろ}だつたが、双子の兄、猛神^{たけがみ}月^{つくよ}夜が超が付く天才なことで自身の異能の関係で当主候補だとか権力争いだとかいう面倒とは程遠い場所^{たけ}で過ごしていた。

そんな神はある日、現当主の呼び出しに応じて本家へと出向く。通された場所は道場、その奥にある神座に安置されていた刀を見て居ても立ってもいらなくなった神は刀を興味本位で抜いてみた。だがなんと、その刀は異世界へと繋がる扉の役割を持っていたの

だ！

焦る臃だったが途中で駆けつけた現当主の姿に安堵したのも束の間、現当主は臃に一つの命を下した。

「その刀を月夜に届けるのじゃ。あやつの身に危機が迫っておる！」

え、助けしてくれるんじゃないの？ と涙目になる暇も無く光に包まれたと思ったらそこは富士の樹海も真っ青な緑に囲まれた場所。もう一度刀を抜こうとするがびくともしない。

「こうなったら絶対に届けてやる……待ってるよチート兄貴！」

天才な兄を助けるため、天災な弟が世界を駆ける。

果たして、臃は無事に刀を届け兄を危機から救うことが出来るのか？

難易度超上級レベルのお使いクエストが今、幕を開けた。

第一話 自業自得プロローグ

その空間は静謐な空気が支配していた。木造のその空間は一般的に道場と呼ばれるものだ。耳に痛いほどの静寂で世界に音が存在しないのではと錯覚してしまう。

だがその静寂は突如として破られる。道場内に響き渡ったのは二つの声。片や事務的な女性の声、片や何処か軽薄な調子の男性の声だ。

「当主様をお呼びいたしますのでしばらくお待ちください」

「はい、ありがとうございます」

扉を開けて現れたのは和服の女と学生服の男だ。案内をしてくれた女性に男はとびっきりの笑顔で礼を言うが、女性は仕事ですからと淡々とした声で応対して出て行ってしまった。取り残される形となった男は大して気にした様子もなく周囲をきよきよと見回している。

「ここに来るのは何年ぶりだっけ……もうかなり昔のことに思えるなあ」

銀髪黒眼に中性的な顔立ち、180センチほどの長身と絶やすことのない笑みのおかげで人好きのする男だ。歳は十八でまだ少年と呼んでも差支えはないだろう。

この男の名は『たけがみ おぼろ猛神たけがみ隴』。この地に強い地盤を持つ異能の一族『つぐよ猛神』の血筋を持っている。現当主の孫にあたるが双子の兄『たけがみ猛神』が歴代当主と比べても勝る天才だったことと、隴に発現した異能力の関係で現在は次期当主候補の座を完全に降り比較的平穏な日常を送っていた。

朧が現在立っている場所は猛神本家にある修練道場だ。見た目は普通だが強固な結界に守られているため核シエルターもびつくりな耐久性を誇っている。代々の当主候補はここで異能を鍛錬するのが通例になっていた。それは核シエルター並の耐久度を持った結界の中でなければ能力の制御を誤った場合の被害が大きすぎるという理由が主にある。猛神の当主を継ぐ源流の異能はそれほどまでに強い。朧も歳が十五になるまでは月夜と共にここで鍛錬していたが、当主候補を降りたその日から足を踏み入れたことは無かった。現当主の呼び出しが無ければ今後一切来ることは無かっただろう。

「そついえば月夜はどうしてんのかねえ」

朧はここ数ヶ月、月夜と会っていない。朧には当主としての責務を果たすため何処かへ行っているという話を聞かされていた。

「ま、あの反則チートキャラ月夜君ならどんなことがあっても大丈夫か——お？」

朧の好奇心旺盛そうな瞳が道場の奥にある物を捉える。その神座と呼ばれる場所には一振りの刀が安置されていた。一見何の変哲もないただの刀に見える。反りが深いことから斬ることに特化した刀だということが分かった。

一瞬、朧の瞳がきらりと光を放つ。後方の扉を振り返り見て誰も来る気配が無いことを確認する様は悪戯小僧のようだ。そのままずかずかと神座に踏み込んで刀を手にする。誰かが掃除をしているのか不思議と刀には埃一つ付いていなかった。

「おお、マジで懐かしい。あの時の刀か！」

あの時、とは朧が当主候補を降りると決めた日のことだ。その旨

を月夜に話した際にここで双方マジの大喧嘩を繰り広げたのだ。どちらも立っているのが不思議なくらいの怪我を負ってなお睨み合い、とうとう動いた月夜がとっさに手に取ったのがこの刀だった。だがしかし――

「抜けなかったんだよなあ……くくつあれにやマジで助けられたね」

そう、抜けなかったのだ。居合をするように振り抜こうとした月夜はびくともしない刀のせいであたらを踏んだ。その瞬間に朧の拳が月夜の顔面にヒットし兄弟喧嘩は決着した。しかし、本当に大変なのはその後だった。朧と月夜は後日、現当主にこっぴどく絞られた。しかもマジ喧嘩をしたことよりも刀を抜こうとしたことを重点的に叱られ、あまつさえ抜こうとした月夜よりも朧のほうが叱られることになった。怪我の痛みよりその理不尽に涙で枕を濡らしたのは未だなお記憶に残っている。

「その恨み今ここで晴らさせてもらうぜ――刀デメエの刀身ツラを拝むことだなあ――！」

右手と左手でそれぞれ柄と鞘を無造作に掴み渾身の力を込める。だが――

「ふんっぬあああつ……！！」

抜けない。抜ける気配すらない。まるで鍔と鞘が一体になってるのではないかという硬さだ。だが朧は諦めることなく様々なやり方で抜こうと奮闘する。ねじりを加えながら力を込めたり、構えをとりながら抜こうとしたり。それでも一向に抜ける気配の無い刀にいい加減に嫌気がさして来る。

「はあはあ……ちつ錆びてんじゃねえのかこれ」

半ばやけくそになりながらこれで最後と決めて構えを取る。月夜がやるように居合の構えを取り、表情を隠すように俯く。音が死ぬ世界に溶け込むように心を無にし、そして――

「卍解――風林火陰山雷！！」

最後にふざけた。

叫んだ名は猛神の異能の象徴とも呼べる言葉。同時に月夜の異能を顕す言葉でもある。もしかしたら、それがきっかけだったのかもしれない。

しんと静まりきった道場の中でキンツという小気味の良い音が響く。

「……あ、マジで？」

抜けた。抜けてしまった。見事な刀身が姿を現すと同時に巨大な異能の気配が滲み出す。気配の中心は臃が左手に握る鞘だ。臃の表情を飾る笑みは次第に引き攣り汗がだらだと噴きだす。心中を支配するのは不味い、どうしようという困惑とバレたら当主^{ジジイ}に殺られるという危惧。

そんな思いを吹き飛ばすかのように、その鞘から光の奔流が迸った。

「ちょっと待て。卍解！？これって卍解出来ちゃったってこと！？」

道場の中を光の奔流が縦横無尽に吹き荒れる。しかしそれも束の間、一瞬だけ光の奔流は動きを止め次の瞬間には鞘を持つ臃の周囲に渦を巻くように殺到した。

流石にヤバイと判断して鞘を放棄しようとするが左手が鞘から離れない。右手も同様だ。このままではどうなるか臃には想像がつかなかった。自業自得という言葉が脳裏をよぎる。

そんな最中、救いは訪れた。

「待たせたのう臃……むっ!？」

「ごめんなさい助けてくださいヘルプミーマイグランドファザー!」

突如として現れた現当主に向かって恥も外聞もプライドも無く心の底から臃は助けを求めた。しかし、この場で救いが来たと勘違いしたのは臃だけだった。

「でかしたぞ臃! 流石は僕の孫じゃ!」

え? と呆然となる臃。それもそのはず咎められこそすれ褒められることをした覚えなどないのだ。そんなことより助けてくれともう一度叫ぼうとするがそれを言わせぬ勢いで当主は言った。

「その刀を月夜に届けるのじゃ。あやつの身に危機が迫つておる!」

「はあ!?! っていうか現在進行形で危機に迫られてる俺を助けてくれないの、ねえ!?!」

「臃よ、お前こそが頼りじゃ……月夜を頼んだぞ」

「聞こえてるよなあ、おい! 覚えとけよこのクソジジイ!! いつか……いつか必ず帰ってきてそのよばよばの体がペラッペラになるまで叩きのめすからな!! マジで覚えてろよ——!!」

憤激に彩られた笑みを浮かべ叫ぶ声すらも巻き込むように光の奔流が朧を中心として収束する。光が完全に収まったときこの世界に猛神朧の姿は何処にもなかった。

第一話 自業自得ブローグ（後書き）

誤字脱字、意味不明な箇所、その他もろもろありましたらご報告
お願いします。

第二話 奇跡的エンカウント

眩い光にたまらず臃は目をつぶる。しばらくして光が収まり視界が回復したとき臃の目に飛び込んできたのは富士の樹海も真つ青な大自然だった。

「……何がどうなってやがるんだ」

未知の体験に臃は困惑する。異能力的な何かが発動したのは確かだがそれがどんな効力を持っていたかが断定出来ない。考えられるとすれば――

「転移、かな。力は強大だったけど攻撃的な印象は全くなかったし……ただどあれだけの力を使って人一人を転移させるってなると何処までも行けそうだな」

臃は念のため体の状態を確認する。特にこれといった異常はない。強いて言えば抜いたはずの刀がしっかりと鞘に収まった状態になっていることくらいか。試しに抜こうと力を込めるがやはりと言うべきかびくともしない。

「月夜に危機が迫ってるからこの刀を届けろ、ねえ。でかしたつつーことはジジイにとっても俺がコイツを抜けたことは僥倖だったってことか？　そもそも兄貴の危機をどうしてジジイが予知出来るんだよ？　せめて状況説明して欲しかった……」

臃は緩やかに頭を働かせるが効果は上がらない。さらには必死になつて月夜のところまで辿り着いても、この刀なしで強敵をフルボッコする月夜を見学する情景がありありと想像出来る。

想像しながらも臙は刀をいじる。抜いた瞬間に転移が発動するな
らもう一度抜くことが出来れば帰れるかもしれないと考えてのこと
だ。

「下手すればさらに離れた場所に転移する危険はあるけど……やら
んよりマシだろ」

最初に抜けたときの再現をするように構えを取る。叫ぶ言葉もま
た同じ。

「卍解——風林火陰山雷！！」

高らかに謳い上げたセリフは森の中に虚しく響き渡り木々の中へ
と溶けていった。

「卍・解！ 風・林・火・陰・山・雷！」

一語一語区切って発音しても何も変わらない。

「くっ……かくなる上は——」

大声を存分に出してせいでテンションが上がってきた臙はそのテ
ンションに乗っかって高らかに叫んだ。

「疾きこと風の如く、徐かなること林の如く、侵し掠めること火の
如く、知り難きこと陰の如く、動かざること山の如く、動くこと雷
霆の如し——常勝不敗の理を見よ！ 卍解——風林火陰山雷！！」

聞こえるのは草木が風によって揺らされる音。ときたま鳥が鳴く
ような声が聞こえる。臙の脳裏にはカラスのアホーアホーという鳴

き声が反響していた。

「うあああああ！！ もうやってられるかああああああああ！！！！」

ついに我慢の限界に達した臙は刀をブーメランのように投擲した。木の枝や葉を強引に突き抜けながら刀は予想以上の勢いで飛んでいく。完全に見えなくなり、音も聞こえなくなったところに臙は正気に戻った。

「し、しまった……無くしたらジジイに殺される！！」

抜いてお咎め無しだったのはタイミング的な問題だろう。だが流石に無くしたとあればいくらなんでもただで済むわけがない。

言葉と同時に、周囲の風がまるで意思を持ったかのように臙の四肢に収束し渦を巻く。息を吸って吐くのも同じ無造作で臙は異能を発動していた。風を小規模の竜巻のように纏い軽く地を蹴り、まるで空を駆け抜けるように刀を投げてしまった方角へと向かった。

「っ——それ以上近づくと容赦しないわ」

日が高く昇っているにも関わらず薄暗い森の中に切羽詰った少女の声が響く。

随分と様になった構えで短剣を持つ少女だ。見ただけでハツと目が覚めるような端麗な顔立ち。しっかり手入れされた金色の髪はウエーブを描きながら腰元あたりまで伸ばされている。全体的に無駄が無くひきしまった体を裾の長い黒のレザーコートを纏い守っている。とても年頃の娘がするような格好ではないが、勝ち気そうな紅

い瞳と合わさって苛烈な印象を見る者に与えていた。

「がはは！ それじゃお嬢ちゃんのお手並み拝見と行くかあ。どこまで近づけばいいんだ？」

だがその苛烈な印象すら逃げ場を無くすように立つ男達にとっては強がりには見えなかった。合計で五人になる男達の格好はバラバラで統一されていない。彼らはこの近隣を根城にする盗賊だった。男達は下卑た視線で少女を見据えながらまるでいたぶるようにつくりと距離をつめていく。少女の背後には巨大な大木が塞いでおり逃げ場がない。

少女は近づいてくる男達を齒噛みしながら見る。心なしか短剣が震えているのは彼らにプライドを傷つけられたからか、それとも恐怖からか。

男達の包囲の輪が狭まる。この後に起こる事を想像して恐怖が次第に心を染める。窮地に立たされた少女は普段絶対に祈ることが無い者に藁にもすがる思いでか細く啼いた。

「助けて———神様」

瞬間、奇跡は響き渡った。

『——疾きこと風の如く——』

その場にいた全員の動きが止まる。堂々と響き渡った声と同時に広がったのは——動揺。誰も身動きを取れない。まるでそれは一語一句聞き漏らすまいとしているようにも見えた。

『徐かなること林の如く——侵し掠めること火の如く——知り難きこと陰の如く——動かざること山の如く——動くこと雷霆の如し』

それは『悪』と名のつく行為をするものにとって死刑宣告にも等しい詩。^{うた}

『——常勝不敗の理を見よ』

ある日突然姿を現した正体不明の勇者を表す詩。たった一夜で数千にも及ぶ魔王の軍隊を滅ぼした逸話すらある男の詩。そして——死んだという噂が流れる男の詩。

『正解——風林火陰山雷』

かくして詩は完成し、常識外の力が発揮される——ことは無かった。

直後に異変が起こらなかったことで男達は安堵し、少女は落胆した。その刹那——

超速の勢いを持った刀が飛来した。

悲鳴を上げる間すら与えず頭部に命中し順番に二人の意識を刈り取る。三人目の胸元辺りに当たったところでようやく止まった。三人目で命中した男は気絶せずにはいたがかなりの激痛に苦鳴を上げる。

少女が息を飲む中、草木を吹き飛ばすような勢いで現れた者を見てついに彼らは悲鳴を上げることになった。

何処か違和感のある銀髪に黒い瞳。ふとすれば女性的にすら見える整った相貌には人好きしそうな笑みが浮かんでいる。細身だが決して非力そうに見えない体を紺を基調とした綺麗な服で飾っている。左胸で金色に光る見たこともないエンブレムは何処の国の物だろうか。少女は考えた。

しかし、男達はその容姿を殆ど見ていなかった。少年が現れてからじっと感じ取っていたのは『魔力』。彼らは必至に少年の魔力を探っていた。だが――

「こ、こいつ魔力が……無い!!」

『魔力』それはこの世界に生きる者にとって絶対に存在する物だ。魔法の行使を可能とする根源の力を誰もが生まれた時から身に宿しているのだ。それは人間でも、魔族でも、魔物でも変わらない。『魔力が無い』ということはまず間違いなく有り得ない話なのだ。その存在しないはずの『魔力ゼロ』はある日突然現れたある男だけ。

魔力を使用せずに魔法を扱う勇者『タケガミ・ツクヨ』

目の前に立つ少年が魔力ゼロにも関わらず風を操っている事を確認した瞬間、男達の行動は迅速の一言に尽きた。

「――『風林火山』だ!! 逃げろおおお!!!!」

男達は気絶していた二人を担いで脱兎の如く逃げ出していく。残されたのは何かを探すかのように視線を動かす少年とある種の熱を孕んだ瞳で少年を見つめる少女だけ。

「ごめん、大丈夫だった？」

優しいな笑みを浮かべて少年は声をかける。

意識がふわふわと浮かぶ現実味が無い感覚に侵されながらも少女は応えた。

「はい、ありがとうございます……神様」
「……はい？」

金髪紅眼の少女『イリア・ステイーレ』は自身を救ってくれた神のような少年に感謝を告げた。

第三話 衝撃ゴシップ

「——『風林火山』だ！！ 逃げろおおお！！！！」

突然の事態に朧は困惑する。少しだけ拓けた場所へと辿り着いた瞬間に人が蜘蛛の子を散らすかのように逃げていったのだ、無理もない。とりあえず朧は身に纏っていた風を霧散させる。

(……『風林火山』？ まさか聞かれてたのか…… 恥ずい)

困惑と羞恥に苛まれながらも朧は視線を巡らせて周囲を確認したところでこちらを見つめる人影に気がついた。その人影は見事な金髪に紅い瞳の少女だ。

朧は見たこともないほどの美貌を前に見惚れるが、しかしそれもほんの一瞬のこと、すぐにビクリと体を硬直させる。なぜなら朧の目の前に立つ美少女は今にも涙が溢れそうなほど潤んでいたからだ。

(マズい…… もしかして投げた刀が当たったのか！？ いや、外傷は特に無さそうだし…… ハッ！)

朧の頭の中で先程の光景がリプレイされる。朧が現れた途端に怯えるように逃げて行った男達。記憶が正しければ二人ほど担がれていたように見えていた。

(もしかして当たったのはさっきの男達か。うむ、ならば問題無し…… じゃないな。そんな突発的な暴力シーンを見せてしまったら上手くお近づきになれ——ん、んん！！ いや違うんだよ。やつぱ可愛い子とはコミュニケーションを取っていかないと人生に色が無いっていうか…… ねえ？)

心の中で誰も聞いてないことで言い訳をする朧。

少女は動く気配がないのでとりあえず声をかけてみることにした。

「ごめん、大丈夫だった？」

もちろん投げてしまった刀が当たらなかった、という意味だ。とびっきりの笑顔を添えて言ったおかげか、少女から怯えるような気配は伝わってこない。

「はい、ありがとうございます……神様」

「……はい？」

朧は聞き間違いだろうかと思わず聞き返した。何故か礼を言われ、次には神様呼ばわり。もしかしたら自分の耳がいかれてしまったのかと朧は危惧した。

「ッ——！！」「ごめん。今の無し！ 忘れて！」

ハッと目を覚ましたかのうように口調を改める少女。わたわたと手足をばたつかせながらも深呼吸をして高ぶった意識を鎮める。数秒後には凜とした笑みを浮かべる少女がそこにいた。

「ふう——」私の名前はイリア・ステイーレ。さっきは本当に助かったわ、ありがとう」

どうやら目の前の少女——イリアの中では先程の第一声は無かった事になっているらしいと朧は認識する。ならば触れてやらないほうが良いだろうと考えた。未だに礼を言われる理由が理解出来ないが少なくとも第一印象は好印象のようだ。

「良く解らんがどういたしまして。俺の名は猛神朧だ。気軽に朧と呼び捨ててくれ」

朧は何気なく名乗るがイリアは怪訝な表情を見せる。
彼女の口から溢れる音は朧にとって予測不能な物だった。

「オボロ……？ ツクヨじゃないの？」

「え？ ちょ、ちょっと待った！ 兄貴を知ってんの！？」

ツクヨという言葉に食いつく。知り合いならば話は早い。とりあえず月夜に会えば何とかなりそうだと朧は漠然と期待していた。

「それは魔王に立ち向かう勇者ってことで有名だから……兄貴ってことは弟さん？」

魔王。勇者。ファンタジックな用語が当たり前のように出てきたことに朧は激しく違和感を抱く。しかもそれが常識だともいうような表情のイリアのせいで違和感が増すばかりだ。

異世界トリップ、という言葉が脳裏をよぎる。朧は自分の笑みから力が抜けていくのを感じた。

（おいおい、いくら存在がチートだからって勇者になるこたねえだろうよ兄貴。んー、つまりあの刀の力は異世界への転移ってことか？ そうなると確実にジジイはこの事を知ってる……ここしばらく兄貴と会えない理由を俺は当主としての責務を果たすためと教えられていた。突然居なくなっただけのことを隠蔽するためにそんな事を言ったのか？ それか言葉通りに受け取るなら責務〃勇者——）

「オ、オボロ？ えと、ごめん。何か気に障った？」

「つと悪い。少し考え事してた。——そう、俺はその勇者の双子の弟だよ……多分ね」

思考の海に沈みそうになっていた意識が浮上する。気遣うようなイリアの様子を前に臃は自信無く答えた。そして即座に頭を切り替える。今は少しでも情報を得る必要があった。

「あー俺は兄である月夜の行方を追ってるんだが……何か知らないか？ 些細な事でも何でも良い」

「うう……言ってもいいのかなあ、これ。正直言つてすごく言い辛いわ」

臃の言葉にイリアは見るからにうろたえる。何かよからぬ情報を持っているようだ。

「あー大丈夫。存在事態が奇跡みたいヤツだから何があっても驚かないって」

「本当に知らないみたいだし教えるけどこれはあくまで噂よ？ その、——じゃったって」

「ごめん、聞き取れなかった。もう一回言ってくれない？」

「だから、その……」

イリアは本当に言い辛そうに言葉を切る。かくしてもたらされた情報は臃を動揺させるには十分過ぎる威力を持った物だった。

「——死んじやったらしいの。魔王との戦いに敗れてっ噂よ」

「……冗談抜き？」

「あくまで噂だけだね。でも現にどこの国でも目撃されてないみたいだからさらに信憑性が出てきちゃってるのよ」

「あの兄貴が死ぬとか考えられねえ……それに、死んでたらジジイ

が俺に刀を届けるとか言うはずが無い。ってことは現在進行形で危機に陥ってる最中か？ あ、そういえば刀」

完全に頭の隅に追いやっていた刀の存在を朧は思い出して視線を巡らせる。さっきの男達に当たっていたならそこらに落ちているはずなのだが――。

「……無い」

「え、何が？」

「刀だよ、刀。飛んでこなかった？ こう、真っ黒な鞘で妙に高級そうな……」

「んー確か二人の盗賊を昏倒させた後、もう一人に当たって落ちた記憶はあるけど」

しかし何処にも見当たらない。足元の草はそれほど伸びていないので草の根をかき分けること無く見渡せる。朧は体中から嫌な汗が吹出す感覚に苛まれる。

「無い、な」

「無いわねえ……もしかしてかなり大事な物だった？」

「月夜に届けなきゃいけないんだよ」

「……なんでそんな物を投げるのよ？ 助けてもらった私の台詞じゃないけどもつとマシな方法は無かったの？」

呆れたようにイリアは言う。確かに助けるためならいくらでも方法はあった。問題は助けた本人はそんなつもりじゃなかったという一点のみ。

「いや、右手が言う事聞かなくてよ……そういえば気になってたんだけど、助けたってどういうこと？」

「……え？」

微妙な空気が二人の間に充滿していく。
かくして朧は月夜に届けるべき重要アイテムを失う事となった。
さらには月夜の安否すら不明という始末。

（あれ、超不味い状況じゃねえ！？）

今更気づいても途轍もなく遅かった。

第四話 少年の力と少女の心

「つまり……別に私を助けるためじゃなかった、と」

「し、知ってたら必ず助けに入ってたよ？」

「オボロ、たらればつてとても無意味なものじゃない？」

「ご、ごもつとです」

朧が刀を投げた経緯を説明すると案の定というべきかイリアは呆れた表情を浮かべた。

朧はというと盗賊に襲われていたというイリアの話を聞いて治安の悪さに驚いた。加えてイリアの腰元のベルトにぶら下がっている短剣を見て、武器を携帯する必要があるほどと判断する。

しゅんとなる朧を見てイリアはしばし黙考し考えがまとまったところでニヤリと唇を歪めて言った。

「んーそれでも助けられたのには変わり無いのよね。だからちゃんとお礼をしてあげる」

「随分上から目線のお礼で——ナンデモナイデス」

まるで格好の獲物を見つけたような猛禽の瞳に朧は気圧される。逆らったらあかん、とワケもなく関西弁で脳が警告を訴えている。

「その……カタナ、だっけ？ それを見つけるのを手伝ってあげる。どうせまだこっちの世界に慣れてないんでしょ？」

「それはありがたい……あれ、俺まだ異世界から来たなんて一言も言っていないよな」

イリアの口から当たり前のように発せられた確認に朧は疑問を抱く。イリアの答えは至極簡単なものだった。

「勇者ツクヨは異世界から召喚された。もうこれは常識に近いわね。そのツクヨの弟なんだからオボロも異世界から来たって分かったのよ」

「へえ……もしも、俺がツクヨの弟を騙ってるだけだとしたら？」

「それでも大して変わらないわね。この世界でオボロみたいな魔力ゼロなんて本来は存在しないの。だからオボロは異世界から来たってことになるわ」

魔力が全く無いと言われた臃は若干ながらショックを受けた。なんだかんだでファンタジーな世界に来たからには魔法を使ってみたかったのだ。

「それに、嘘だったらすぐに分かるしね」

「ま、まさか読心の魔法とかあんの！？」

恐ろしい世界だと臃は恐怖しそうになるが、イリアは首を横に振る。どうやら違うらしい。

「オボロ、もしかして気付いてないの？ 思ったこと全部顔に出てるわよ」

「そんなまさか。俺は笑顔のポーカーフェイスですよ？ 思ったことが顔に出るわけが……」

「……その笑顔に感情が乗ってちゃだめでしょ？ ポーカーフェイスなら同じ表情を維持しなきゃ」

「ガーン！ ってことは今の今まで感情ダダ漏れ！？ 妙に俺の感情を言い当てる奴が多かったのもそのためか！ 誰か一人くらい教えてくれたっていいじゃないか、んにやるー！！」

器用にも笑顔のままショックを受けたり憤慨したりする臃。ころ

ころと表情を動かす様をイリアは至極面白そうに見つめていた。

「まあまあ、それはこれから徐々に直していけばいいでしょ？　と
りあえず街まで行きましょう？」

「おう……って、探す当てはあるのか？　あの盗賊達が持っていた可能性が大きいと思うけど」

歩き出したイリアに着いて行く形で臃は歩く。自信に満ちた表情で語り出すイリアが臃にはとても頼もしく思えた。

「うん、十中八九あいつらね。盗んだり奪った物は何処かにあるはずのアジトに運ばれるはずだけど……今回は事情が違いわ」

「事情、っていうと……？」

「盗んだ物が勇者の私物だったことよ。多分だけあいつらはオポロのことを勇者と勘違いしてるはず。だって魔力ゼロなのに風を纏ってたんだもの。容姿とかは知らなくてもそれだけで十分。なら、そんな恐ろしい存在の持ち物を後生大事に抱えるなんてありえないわ。いつ取り返しに現れるかわからないもの」

「なるほどな……だけど流石に捨てるのは躊躇うはず。見た目も高級感があるから一番考えられることは――売却か！」

「そう、それまでできるだけ早く足がつかないように。それにはここから一番近い位置にある街ジィネアが好都合なのよ。今は行商人達も多く集まってるからね」

臃の反応が気になったイリアは言葉を切って少し高い位置にある臃の表情を伺う。案の定感情ダダ漏れの満面の笑顔が浮かんでいた。

「すげえ、すげえよイリア！　こんな短時間でそこまで考えつくなんて……」

「ふふ、ありがと。売り払う前に押さええたら一番ね。もしも売り

払われた後で見つかったら……その時は貸しにしてあげるわ。利息は取らないから安心してね」

「う……その時はよろしくお願いします」

手伝いに収まらず借金の約束までしてくれるイリアに臃は深く感謝する。もしあのまま一人で探す当ても何もかも無かったらどうなっていたかと考えて身震いした。

臃は歩きながらイリアから話を聞き情報を仕入れていく。現在自分たちがいるのはユステシアという国だということ。この世界には人間と魔族、それに加えて魔物が存在しているということ。どれも興味深いことだったが、臃には一番気になっていたことがあった。

「イリア、魔法について教えてくれないか？」

「いいわよ。魔法っていうのはこの世界の生き物が潜在的に持つてる魔力を使って行使される力の総称よ。魔族が一番魔法の力が強くて、人間は二番目、次に一部の魔物ってところしら」

「魔物も魔法が使えるのか。確か……人型を取ってるのが魔族でそれ以外だと魔物になるんだよね？」

「ええ、そのとおりよ。まあ使えるとは言ってもせいぜい身体強化くらいだけだね……。次に使える魔法の属性だけど基本的に一人につき一つと考えてもらっていいわ。属性は大まかに分けると火・水・風・土・金・光・闇ってところね。稀に二つの属性を使える人もいるけど本当に極稀。三つ以上の属性を使えた人は今まで存在しないわ——オボロのお兄さんを除いて、ね」

「ふむ、俺や兄貴の力は魔法じゃないから厳密な意味での比較にはならないけど傍目から見たら驚異そのものってことか」

複数ある強力な異能に加えて月夜は剣術の腕も達人級だ。臃にはどうしても月夜が無双状態になっている光景しか想像出来ない。真

偽のほどは別にして倒したという魔王に会ってみたいという気持ちも出てくる。

イリアはその話題を待っていたと言わんばかりに目を輝かせる。魔力を使わずに魔法に似た力を使えることが大分気になっていたようだ。

「そう、それよ！　ずっと気になってたんだけど、オボロやツクヨの力ってどうなってるの？　やっぱ魔力に似た別の物が体の中にあるの？」

「んー……特にそういった物は無いな。完全に能力として備わってるんだよ。物を持ち上げる、速く走る、何かを記憶する。そんな能力に混じって当然のようにあるものなんだ。だから特に何かを消費して発動するってことはない。ただ、使い過ぎれば疲れたり体に異常が出たりするけどな」

「ほうほう、ちなみにオボロはどんなことが出来るの？　やっぱ双子だし『風林火山』の四つ？」

「いや、俺は——ちよっと待ってくれイリア。何か来るぞ」

臃の感覚が接近してくる何かを捉える。

「え？　ええっと……よく分かったわね、多分魔物よ」

遅れて察知したイリアが魔物だと断定する。

イリアを庇うように臃が前に出た瞬間、右前方の木の影から茶色い巨体が飛び出してきた。猪を巨大化させ立派な牙を生やしたような魔物だ。血走った目で今にも飛びかかるとする気配を漂わせている。

「リアルブルファンゴかい。まあ問題なくいけるかな」

「ほ、本当に大丈夫？　あいつの皮は生半可な攻撃じゃ通らないわ

よ」

「大丈夫大丈夫。タイミングもちょうどいいから俺の能力を一つ披露させてもらいますよっと」

寸分も気負いすることなく臃は無造作に前に出る。それと同時に巨大猪も雄叫びをあげながら突進を開始し、臃と巨大猪の差が一瞬で縮まる。激突。イリアは紙切れのように吹き飛ばされる臃の姿を幻視したが現実はそのような事態にはならなかった

重たい空気を叩いたような音があたりに響き渡る。イリアはその光景を目の当たりにして言葉を失った。重さにして軽い自動車ほどはある巨大猪を臃は右腕で受け止めていたのだ。

不自然なのが傍目から見てもよくわかる光景だった。たとえ臃がかなりの怪力を誇っていてもその重さを消すことは出来ないはずなのだ。だが、臃の足元を見てもそんな重さが掛かっているようには見えない。そこでイリアは気づいた。

（手が……触れていない？）

そう、臃は右腕で受け止めてはいなかった。巨大猪は見えない壁に押されるようにその動きを止めていた。臃は右腕に意識を集中させるように左手で右の手首を押さえる。

「これが俺の異能の一つ」

ゴッ、と風が勢いよく臃へと殺到する。あっという間に圧縮された風の塊は臃の言葉と同時にその威力を開放した。

「吹き荒ぶは暴嵐が如く」

爆発するように発生したのは小型の竜巻。まるでその体が紙切れ

であるかのように翻弄されながら巨大猪が宙を舞う様をイリアは呆然と見送りながらぼつりとつぶやいた。

「……勇者がどうして恐れられてるのか分かった気がするわ。魔力消費なしでこんなことが出来るなんて反則じゃない」

「ちなみに兄貴は六つの異能を使いこなせる。俺は『暴嵐』も入れたら五つ」

「へえ、化物兄弟ね。もしくは歩く攻城兵器」

「今日会ったばかりなのに容赦無いですねイリアさん！ でもそれがいい」

「街の中で使わないようにね……警邏の人に見つかったらまず間違いないく追い出されるだろうから」

「はいはい」と

何事も無かったかのように二人は歩き出す。臃は至って普通に、イリアは不自然に高鳴る胸の鼓動を悟られないように隠して。

（たった一つの異能だけでこの威力か……ますます欲しくなっちゃったわ。絶対に手に入れてみせるわよ、オボロ）

森の終わりが近づき石畳の街道が見えてくる。ジィネアの街はすぐそこまで迫っていた。

第五話 嵐轟く祭日・1

空気を血臭が侵しその原因を作った剣の先から血が滴り落ちてゆく。その剣を握った男の前には首や胴を無惨にも切り裂かれた死体が五つ並んでいた。全員がバラバラで統一されていない服装でその死体がイリアを襲った盗賊だということが分かる。

しばらくして、がさがさという音を立てながら二人の若者が姿を現す。鎧や鎖帷子などの装備には共通点が存在しないが、皆一様に血に濡れているということが最大の共通点だった。

「こっちは五人いた」

「向こうには八人。合計で十三……依頼達成だな」

彼らは冒険者。最近近隣で活動する盗賊の駆除を頼まれていた。かくして合計で十三人いた盗賊は全滅する結果となった。

「さて帰ってギルドに報告を——ん？」

「いや、こんな物が……」

そう言っただけで拾い上げたのは漆黒の鞘に包まれた反りの深い刀。その外観を見ただけで、その場にいた全員が売れば高値がつくとすぐに判断した。

しばしの沈黙が流れ、やがて一人がニヤリと笑って口を開いた。

「……落ちてたんだ」

本来、盗賊が奪った金品や食料などは依頼に則り全てギルドに渡すことを義務づけられている。だが、依頼遂行の途中もしくは終了後に拾ったとなれば話は別だ。そう、どうせ見ている者など当人以

外にはいないのだから。

「ああ、そうだな。その茂みに落ちてた」

「うむ。俺も同意だ」

「くく……そう言ってくれると思ったぜ。今夜は飲みだ！」

三人の冒険者達は陽気に笑いながらジィネアへの帰途についた。

行商街ジィネア。ユスティア国内で最も商業の盛んな街であり、自国の名物から他国の貿易品などまで幅広く取り扱われている。それに加えて現在はクリュクス祭の真只中であり、ジィネアは例年と同様の盛り上がりを見せていた。

「クリュクス祭？」

「そう。商業の神クリュクスに感謝をする目的で設けられた祭りよ。今のジィネアには世界中の品物が流れ込んでいると言っても過言じゃないわ」

太陽が真上に上る頃、喧騒に包まれ露店で埋め尽くされた通りを朧とイリアの二人は肩を並べて歩く。とても賑やかな雰囲気と自然とテンションが上がってくるのを二人は感じていた。

「……コミケってこんな感じなのかな」

「こみけ？」

「や、なんでもない。……この中から目的の物を探すのは骨が折れるなと思ってさ」

「……確かにそうね。あ、ちょっと待ってオボロ」

そう言つてイリアが立ち止まったところは色とりどりのアクセサリを取り扱っている露店だった。何か気に入った物でも見つけたのだろうかと臃も覗き込む。

「そういえば通貨の話をしてなかったわね。通貨は世界共通で何処の国でも同じように使えるわ。単位はエーレ。通貨の種類には金・銀・銅の三種類あつて、金貨が一万エーレ、銀貨が百エーレ、銅貨が一エーレの価値があるの」

「へえ……飯を三食で宿を取るつてなると一日いくらくらいかかるんだ？」

「百エーレあれば美味しい物食べて良い宿も取れるわ」

（単純に考えて一人で一月に三千エーレか。金を稼ぐ方法も知つておかないとな）

臃が考えることをしている間にイリアは銀貨を十枚渡し、緑色の寶石のついたネックレスを受け取る。千エーレ、随分高い買い物をしたなと臃が思っていると、イリアは目を閉じネックレスを祈るように握り締めて何事かをつぶやく。それはあまりにも小さいつぶやきだったため臃には何を言っているのかわからなかった。すぐにそれを終えたイリアはその手に握っていたネックレスを臃に差し出した。

「はい、オボロ。これを肌身離さず着けておいて」

「自分のために買ったんじゃないのか……」といふかなぜ突然？
「私があげたかったからつて言つてもいいんだけどね、れっきとした理由はあるわよ。オボロ、今の貴方は勇者ですよーつて宣言しながら歩いてると同じなの。この世界で生きるほとんどの人が魔力を感じ取ることが出来るわ。普段なら『あれ？』つて違和感を持つくらいだけど集中して探られたら魔力が無いことなんて簡単に分かっちゃうのよ」

「マジですか」

「と、いうわけでこのネックレス。緑の宝石は風の象徴。これに私の風属性の魔力を込めたからこれを身につけていれば大分誤魔化せるはずよ」

「へえ、そんなことも出来るのか。……ていうか誤魔化す必要ってある？」

朧は疑問に思い質問をぶつける。別に悪いことなんてしていません。けではないのでコソコソする必要は無いはずだ。

「あら、対魔王用決戦兵器になりたいの？」

「そう聞かれると誤魔化したほうがいい気がしてくるな……」

そうでしょう？ とつぶやきながらイリアは一度は朧の手に渡ったネックレスを極自然に取って朧の首につけようとする。——何故か正面から。

「ちょ、ちよつとイリア……さん？」

「こら、動かないでオボロ。着けにくいわ」

首に手を回して密着するその様は抱き合っているようにしか見えない。女性特有の甘い匂いと柔らかさに攻め立てられながらも朧は必死に耐える。

（う、うう……なんで女の子ってこんな良い匂いを……ってイリアさーん！ 胸、胸当たってますよ！？ 当ててる？ もしかして当たてるのか！？ いやいや勘違いするな俺。耐えろ、ここで手を出したら唯一の協力者が……うわあああああん！！）

それからイリアが完全にネックレスを取り付けるまでの間。朧は

天国と地獄の狭間で揺らめくこととなった。

「これで、よしと。……どうしてそんな疲れた顔してるの？」

「き、気のせいですよ気のせい」

バクバクと鼓動を刻む心臓を落ち着けるように臃は胸に手を当てて深呼吸する。その様子をイリアが小悪魔のようなしたり顔で見つめていたことにはついぞ気付くことはなかった。

どちらともなく再び二人は歩き出す。臃はとりあえず場を持たせるために適当な話題を振ることにした。

「そ、そういえばイリアって風属性だったんだな。印象的には火だと思っただが」

「へえ？ どうしてそう思——」

その言葉を聞き終わる間もなく、臃の世界は暗転した。

「……え？」

呆然と声を上げたのはイリア。一瞬前まで隣にいた臃が消えたという現実を理解が追いついていない。

その臃は十数メートルは離れた場所でひしゃげた屋台に頭から突っ込んでいた。

一拍遅れて悲鳴や怒号が響き渡る。道行く人々や商人達は敏感に異常を察して離れていく。

そんな中、全ての元凶である襲撃者は訝しげな声を上げた。

「はて、間違いだっただか？」

襲撃者は真つ黒なローブで頭からつま先まで覆っている。見てい

るだけで暑苦しくなってきたような格好の襲撃者は何かを確認するように臙を見ていたが、やがて興味を無くしたかのように言葉を零して踵を返した。

「間違いであつたか……つまらん」

襲撃者は野次馬のように周囲に集まる群衆をもとめせずに立ち去ろうとする。だが――

「おい、待てよ」

吼え猛るような怒りに燃えた声がその背に追い縋った。前触れも無く突然に突風が渦を巻き、折れた建材を巻き込みながら襲撃者へと殺到する。

「――はあっ……！」

襲撃者はそれを一瞥すると右手を差し出すように突き出し裂帛の気合を発した。即座に右手の前方に魔力が展開、地面へと叩きつけるような風の障壁が発生する。突風は障壁に難なく阻まれるが、既に十分その役割を終えていた。

その役割とは目眩まし。襲撃者の注意が突風に行った瞬間、臙は地を駆けて襲撃者との間にあつた距離を詰めていた。左手を手刀の形に変えローブが作る死角から首元へと叩き込む。

「ほう……！」

襲撃者は感嘆するような声をあげて身を捻って躲す。臙はそれを追ってすかさず右腕でアッパーを繰り出した。だが、それは罠だ。

襲撃者がローブの中で笑みを浮かべると同時に臙の後方に魔力が

風を形創る。三本の剣の形を取った風は臙を斬り刻まんという勢いで放たれる。

後方から迫る風を感じ取った臙は牙を剥き出しにする獰猛な笑みを浮かべて叫んだ。

「温いんだよテメエの風は!!」

臙の周囲で暴風が爆発的に嵐を形成する。剣の風はその嵐に有無を言わず飲み込まれた。

襲撃者が驚愕するよりも、臙の右手がそのロープを掴むのが速かった。

「一発で我慢してやる——せいぜい腹に力入れて耐えろ」

「……………!!」

嵐が臙の右足に収束していく。完全に収束した瞬間、轟音を上げ、空気を捻り潰し、まるで大砲のような威力を持った右足が放たれた。襲撃者は体をくの字に折り曲げながら吹き飛ぶ。嵐の余波で周囲の風が死に辺りが静寂に包まれる。その場にいた全員が息を飲む中、誰かがその恐怖に満ちた声を上げた。

「ま……魔族だ! 逃げろ……殺されるぞ!!」

直後、パニックに陥ったその通りは阿鼻叫喚の地獄絵図へと変貌した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1578q/>

エランドブレイブ

2011年1月21日22時05分発行